畑山博

イソップ風仙人術入門

畑山博

イソップ風仙人術入門☆奥付

1981年3月20日　初版第一刷発行

著者　畑山　博　©Hiroshi Hatayama 1981 Printed in Japan

発行者　高橋直良

発行所　株式会社冬樹社　東京都千代田区神田神保町3-27-6　〒101
電話（03）264-0346（代表）　振替東京8-77757

印刷　日本製版株式会社　製本　株式会社美成社

定価　一三〇〇円　落丁乱丁本はおとりかえいたします。0095-10387-5190

著者紹介　畑山　博（はたやまひろし）
昭和十年五月、東京に生まれる。
昭和四十七年、「いつか汽笛を鳴らして」で、第六十七回芥川賞を受賞。
小説のほか、ルポルタージュ・人生論など多方面で活躍をしている。

イソップ風仙人術入門

目次

イソップ風私の女性学入門

ただ一度もてた話　11
銀座待つ街　16
雌の三毛猫　21
私のゴールカ　24
木もれ陽のある景色　28

われら草食動物

グレープフルーツの食べ方　35
ひと鍋の山羊の乳　38
じんじんじなし　42
酒とスプーン　46
月下の酒　49

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いつかへの旅

小さな旅 55
りんごの木の下で 58
山羊のいる部屋 61
北行列車ヤジキタ旅 64
与那国島の女 64
石垣島のセーラー服 66
鹿児島湾の島拾い 67
山陰の海 70
野辺山のランプ 71
富士の転落 73
北海道常呂のバス 74
サロマ湖の老人 76
東北維新・新幹線がゆく 78
知床旅情ふたたび 97

イソップ風ソヴィエト旅行術

わたしの好きなジョーク　119
モスクワの干ししいたけ　121
ロシア式ユーモア　124
おお目玉焼き　127
空港のねこ　130
ソヴィエトのマリリン・モンロー　133

イソップ風心の歌の唄い方

羽衣くん　155
義　足　160
去る者の季節　163
含羞の人　166
盲目の少年　172
酔うほどに見えてくる人　175

私だけの動物園

あひるの思い出 181
「私の猫がいない日々」 185
仔猫の思い出 188
鳥たちと母 191
けったいな街 194
鳥たちの儀式 197

人生は恥のうら実り

買ったばかりの屋根を飛ばされ 203
翔びそこなった男 216
恥のうわぬり 220
生きている木像 223
ぼくはディンカ族 226

イソップ風仙人術入門

レモンを持って山登り　231
三人の相模守　235
木こりたちの尾根　239
金魚式わが山登り　243
ふしぎな山　247
残雪の魔力　249
なぜかわたくし晴れ男　254
カモシカの脚　260
マヨネーズ一本さらしに巻いて　264
猿語が出来ます　267
心しみじみ仙人志願　269
あとがき　272

装丁　古川タク

イソップ風仙人術入門

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

イソップ風私の女性学入門

ただ一度もてた話

那須の矢板市高原町の山の上に廃校がある。二年ほど前、ある雑誌の記者と二人でそこを取材しに行ったことがあった。

学校は小学校。建物も設備もまだ充分使える立派なものなのだが、過疎化ですっかり生徒の数がへってしまったのだ。そこで仕方がないので残った生徒たちを下の町の本校に移し、毎日タクシーで送り迎えをはじめたのだ。

でも、きょうのぼくのこの話は、その学校の話ではない。取材が終って泊まった宿の話である。

元々が開拓村で牧場と農家しかないところだ。ホテルなんかあるわけはない。でも、釣りにくる人たち相手に小さな民宿があるというので、ぼくたちはそこへ行った。渓流の崖の上にある田舎風のとても感じのいい家だった。が、上から呼んでも横から呼んでも誰も出てこない

のだ。日は暮れてくるし、町へ下りるにしても遠すぎる。ひょっとすると今夜は野宿かなあと途方にくれていた。と、そこへぐうぜん、耕うん機を運転した農家の人が一人通りかかったのだ。

「ここの家は、今晩も帰らんよ。中には猫が二匹おるけど、猫じゃ、お客のもてなしは出来めえ……」

初老の農夫は言った。

「いっそのこと、台覚寺へ泊めてもらったらいいよ。あすこは東京あたりからときどき信徒の人たちがきて泊まっていく寺だから、宿坊があるよ」

農夫に聞いた道を小一時間ほど登って行くと、なるほどお寺が見えてきた。広い前庭があって、コンクリート二階建ての立派な宿坊と本堂がある。そうして裏手の方に作りかけの大きな五重塔のようなものが見える。

ぼくたちは宿坊の中に入って行った。耕うん機の農夫が電話をかけておいてくれたので、お寺の大黒さん（奥さん）がすぐに出迎えてくれた。

大黒さんと一緒に、十三、四歳ぐらいだろうか、小柄で実に可愛らしい少女が、玄関に三つ指をついて出迎えた。少女は頭はおかっぱなのだけれども、一休さんみたいな墨染めの衣を着ていて、それはもうなんとも言えずチャーミングな尼さん姿なのだ。

ぼくたちは、見とれて、思わず「ほう」とため息をついた。

少女が部屋にお茶を運んできたとき、ぼくは「可愛いなあ。きみは中学生の尼さんですか？」ときいた。

すると少女はとたんにちょっと唇をとがらせて、

「わっ、ちがいます。わたしはもう二十六歳です」

と言った。東京の大学を出てしばらく会社に勤めていたのだけれど、父親が急に感ずるところがあって、この那須の山の中にお寺をひらくことになった。それで自分も尼さんになってついてきたと言うのである。

もう一度ぼくらはため息をついた。どおりでお寺が新しいと思った。それにしても急にこんな山奥へ入ってしまって淋しくないのですかと、彼女に訊いた。

「み仏の世界を知ってからは、淋しいというようなことはありません」

彼女は言った。

「若い人たちに、もっともっと、み仏の世界のことを布教できるようになるために、わたし自身をみがかなければなりませんから」

「そうですか。若い感覚の仏教ですか。すると、お経なんかも、いつもお通夜のような読み方ばかりでなくて、何か音楽みたいにやったりするのですか？」

軽いユーモアのつもりで、ぼくは訊いた。すると彼女は、真顔でこう言うのだ。

「はい。そうなんです。ロックのリズムであげたりします」

ぼくはとたんに嬉しくなった。話ははずんでこのあたりの山の四季のこと、彼女の好きな歌のこと、ぼくたちの仕事のことなど、夜がふけてもいつまでも終りにならなくなった。

そのうち彼女が、ぼくに「どういう本をお書きになるんですか?」と訊いた。ちょうど相棒の記者が、ぼくの著書を一冊持っていて、それを彼女にあげた。

すると彼女は、「これを今晩寝ながらずっと読みます。お休みなさい」と言って部屋へ帰って行った。ぼくたちも寝床に入った。

それから小一時間ほどたったろうか。真夜中だった。とつぜん枕元の電話が鳴った。さっきの彼女からだった。

「今読んでるんです。とてもすてきです。眠れないんです。それで、こんな本をお書きになった方と今一緒の屋根の下にいるなんて、とってもふしぎな気がしてかけてしまいました」

それでは、もう一度お休みなさいを言う代わりに歌を一つずつ歌いましょう、とぼくは言った。そうして「草原情歌」を受話器に向かって歌うと、受話器の中からは「赤いサラファン」がお返しに聞えてきた。

さあそうなったらまた止まらない。ときならぬ真夜中の電話コンサートが、よっぽど彼女の気に入ったらしい。「もう一曲」「アンコール」の連続になった。

電話コンサートは、しだいに熱っぽく佳境に入っていった。そうしてとうとう彼女八坂光院さんがこう言うのだ。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com